

CBRC Newsletter

<http://www.cbrc.jp/>

20



蛋白工学から生命情報工学へ



野口 保

(Tamotsu NOGUCHI)

副研究センター長

エッセー ●●● 1

トピックス(EXPO、養成コース) ●●● 2

研究紹介(木立) ●●● 3

お知らせ・成果紹介・研究員紹介 ●●● 4

私がバイオインフォマティクス(当時はドライの研究などと呼ばれていた)の研究を本格的に始めたのは、1988年に蛋白工学研究所(PERI)で仕事をすることを得てからになります。当時の研究所は、生物実験を行うウェットのラボに計算科学を行うドライの研究者が同居している所がほとんどでした。それに対して、PERIは、先進的な組織で、研究所内にウェットとドライのラボが独立に存在し、それぞれ独立した研究テーマを持って研究を行っていました。ただ、バラバラに研究しているだけでなく、研究所内に横断的な研究テーマを持ち、ドライとウェットが連携した研究もあり、それぞれの研究で多くの成果を出しました。海外でも、1988年に米国のNCBIが、1992年に欧州のEBIが設立されましたので、ドライを独立させるのが世界的な流れになった時代だったと思います。

その流れからは少し遅れましたが、

2001年4月に生命情報科学研究センター(前センター)が設立され、バイオインフォマティクスの研究を主体的に行いたいと望む研究者が集まりました。前センターは予想を上回る発展を遂げ、この3月に終了しましたが、この6年間で多数の有用ソフトウェアやデータベースが開発され、Webなどで公開されています。この4月に新たに設立された生命情報工学研究センター(新センター)は、これらの成果をもとに、より応用に直結した研究開発を目指すセンターとして生まれ変わりました。前センター設立当初に比べ、我々の研究を取り巻く環境も変化し、バイオインフォマティクスを理解して下さる実験研究者の方が増え、既に大学や製薬会社との共同研究を通じて我々の技術が活かされています。新センターで今後開発される技術は、実験研究者の理解をさらに深め、生命情報工学の発展に寄与することと思います。

私にとってバイオインフォマティクス分野の研究の開始点である蛋白「工学」研究所は特別な場所であり、生命情報科学研究センターがその「工学」を含む生命情報「工学」研究センターに発展することは、私にとっては望ましい方向でした。それは、タンパク質立体構造の構築原理など生命現象を理解したいという知的好奇心を持ちつつ、もともと工学屋である根っこの部分がそう思わせるのかもしれない。

新センターは、これまで以上に「工学」を意識して研究を進めます。そのためには、実験研究者に限らず、また産総研の内外を問わず、様々な方々との協力関係をより増やし、強固にしなければなりません。新センターにおける研究成果をご理解いただき、より多くの方々と研究する機会が得られればと思っています。